

—第10回—

「若い母親ががんで亡くなること —HPVワクチンと関連して—」



茨城県立中央病院
茨城県地域がんセンター

よし かわ ひろ ゆき
病院長 吉川 裕之

歌舞伎役者市川海老蔵さんの妻であり、元ニュースキャスターの小林麻央さんが2人の小さなお子さんを残して、乳がんのために34歳という若さで旅立たれました。がんで亡くなることは常に悲しいことではありますが、若いお母さんの死は特に悲しく感じます。私は、婦人科がんを専門としていた関係で、数十人もの30歳代前半で小さなお子さんのいるがん患者さんの死に立ち会ってきました。それは「子宮頸がん」が若い世代で急増しているためです。女性特有のがんとしては、「子宮頸がん」は乳がんに次いで罹患率が高く、特に20～30代のがんでは第1位となっています。そのため欧米では子宮頸がんを『mother killer』と呼んでいます。

世間ではがん検診だけで子宮頸がんを激減させることができるという誤解が多く見受けられます。確かにそれは45歳以上に限って言えば正しいことといえます。がん検診受診率が80%以上を誇るオランダなどでも子宮頸がんは40歳未満では全く減少しておらず、むしろ35～39歳が罹患のピークになっています。日本でもがん検診受診率は40%ではありますが、子宮頸がんの罹患のピークは同様に35～44歳であり、30～34歳で罹患する方も少なくありません。胃がん検診でスキルス癌が減少しないのと同様に子宮頸がんもがんの成長が早い40歳未満の方の罹患率は減少せずに増加しているのです。そ

のため海外では子宮頸がん予防のため、HPVワクチン接種が推奨されています。

この若い女性の子宮頸がんを制圧するために世界で普及しているのがHPV(ヒトパピローマウイルス)ワクチンです。日本では公費によるHPVワクチン接種プログラムが2010年12月に開始されました。しかし、2013年6月にHPVワクチンは推奨中止となり、すでに4年が経過しました。結果として、1994年から1999年に出生した女性で50～75%に達した接種率も2001年以降に出生した女性では急減し、1%以下にまで減少してしまいました。世界的には日本で副反応とされる症状とHPVワクチンとの因果関係は科学的にも否定されており、多くの国で安全なワクチンとして高率な接種が続いています。しかしながら、日本ではHPVワクチン接種の推奨が中止されているのです。子宮頸がんによって若い命が奪われることがないように、またがん予防の機会そのものが失われることがないように多くの学術団体はHPVワクチン接種推奨の再開を要望しています。

子宮頸がんは女性の人生に大きく影響を与えます。若い世代の女性の方々、また若い世代の女性を持つご家族の方々にはHPVワクチンやがん検診のことなど、子宮頸がん予防についてぜひ話し合ってみて下さい。正しい知識を得て、最大限にできる予防をしてほしいと望んでいます。